

第1回 須崎市津波避難総合対策専門委員会 議事要旨

日時：平成24年8月8日 午後 2時

場所：総合保健福祉センター会議室 2

出席者

| | | |
|----------|------|-----------------------|
| 委員長 | 島谷幸宏 | 九州大学大学院 教授 |
| | 宮脇工 | 土佐国道事務所 事業対策官（代理） |
| | 吉岡重雄 | 南海地震対策課 地域支援担当チーフ（代理） |
| | 松村俊徳 | 須崎警察署 警備課長（代理） |
| | 林田周一 | JR四国 高知企画部長 |
| | 田部博史 | 須崎商工会議所 会頭 |
| | 八木俊之 | 須崎消防署長 |
| | 植田裕次 | 須崎市建設課長 |
| | 西森茂幸 | 須崎市健康福祉課長 |
| | 高和佳夫 | 須崎市学校教育課長 |
| コーディネーター | | |
| | 長野正孝 | 須崎市アドバイザー |
| 須崎市長 | 楠瀬耕作 | |

（順不同）

議事概要

コーディネーターより、「須崎市の津波避難と減災対策（案）」について提案・説明があり、以下のような各委員の意見交換、質疑応答が行われた。

- 専門委員会の最終目標は基本計画、アクションプランを作るということでしょうか。資料にいろいろ要望があったのは、計画の中に位置づけるということか。そうだ。
- すばらしい提案だが、津波に強い樹種まで提案してもらい、みなさんに植えてもらう、企業にも植えて頂きたい。桐間の大型の商業施設、娯楽施設に避難しなければならないという視点を皆で共有し、協力しようという精神が重要。それはまだこれからです。

- 今回非常に大きい想定津波がだされたが須崎ではどういうとらえ方をしているか。須崎では23.9mというのは千年二千年に一度の最悪の想定であり、それよりは100年200年に一度のもう少し発生頻度の多いものとわけて考えていかなければならない。千年二千年に一度の津波はいかに避難するか、100年200年の津波では、多重防御・減災対策である程度生命財産を守るというとらえ方をしている。
- 今日説明があったクラスター防護計画はどちらに対してか。避難を重視する巨大津波である。100年規模の津波についてはもう少し簡単に止められる、もう少しまばらな樹林帯で考えることができる。
- 巨大津波に対して今までは逃げるだけであったが、漂流物対策やがれき対策を行って、火災を出さず、死者が少ないような形に持っていきたいという提案である。一次避難場所のタワーの上に逃げたが、下のがれきから火がふくところまでは想定していない。巨大津波を単に高さだけで克服して避難できたとするのは危険である。
- 樹林帯の整備、関係機関との十分な連携が必要
- 植樹の設置方法を詰めるべき、具体的に進めるのは関係機関との十分な連携と方策が必要という意見がでたが、今回の基本計画は処方箋をかくことで、この委員会はこの解決方策がありますよといった処方箋を書く組織です。具体的にそれを動かしていくのは通常の行政レベルの組織なんで、それはそこでご検討していただくことになるのではないかと思います。
- 委員長見解としておそらくここで1年という短い期間で決められることは限られている。大枠の計画で合意し、①そのあと話し合いをする中で決めていかなければならない事柄、②市民参加の中でやらなければいけないことがいろいろあるが、すべてこのとおりにはいかないことがたくさんある。この思想・発想は素晴らしいもので、どうこれを具体化していき、今回の計画の中にどこまで書き込むかが重要である。
- 緑の木を植え、育つまでは柵で防護していく発想は素晴らしい、現実的にいろいろ解決していかなければならない問題があり調査が必要で、その上で議論として進めて行く必要がある。
- 須崎市として大きな防波堤をつくるといったことを提案しているわけではない。道路の一部に緑をつくるということは、須崎市はできることである。財産をどうするかという所有権の整理もできるそれから道路法の32条の協議もできる。国もできるし、

やらないからできないのです。やるうえで調整すればいいことである。
協議の話で、制度としてできる。

- 制度としては可能だと思う。それに対していろんな議論形成を含めてやっていく必要がある。
- ここの基本計画としてどこまで書き込むかであるが、一番大切なことは、少し難しい点とか、できる点を合意をしてみんなでやろうよねということが大切で、これから実行に進んでいきたいと思いますという合意がきちりとれるような計画づくりになっていくことが大切。
- 想定津波ということについて、高さだけで考え、がれきや火災までは想定すべきでない、いやこれは想定すべきなんだという議論については少し県の中でも議論を深めていただければありがたい。高知県は5月に公表したものは、応急的なもので内閣府が行っている津波想定11のうち2つしかやっていない。時間とか予算の制約がある。秋までには国の想定11ケースすべてを計算する、今は高さの議論しかできていないが、秋には流速や流れの方向、ベクトル図まで出す。その後、各地域に提供しそこでもう一度考えてもらう。
- 県では、高さの議論をして、流れの議論をしてそして、流れの速いところなどではがれきが発生するなどの議論を段階的にしてゆく考えである。まだはっきりと瓦礫とか、火災についてというところまで、どういう扱いになるかというところまで議論は進んでいないが、火災とかがれきは被害想定に一定折り込まれていくものであり、従来でも考えられてきたことで、今後一定反映されていくと考えている。
- いろんな対策について、具体的に記述され、津波の避難階段等については道路の管理施設の一部として作るというようなこともあって、構築するということが可能になっている。道路の予算というのは道路の新設・もしくは管理を主とした目的として予算化されているということで、それに付随するものであれば実施することが可能と思われるが、一般の減災対策になりますと名目が違ってくる。
- 今回、須崎バージョンというか須崎モデルはほかとの違いは「高さを克服」するのではなく「流れ」をコントロールすることで、どうやってコントロールしていくかということをお島谷先生にお願いしている。
- 人の命が亡くなるのを防ぐことをまず合意すること、次に。仕組みをどう特化するかと

いう次の問題で、こういった施設が絶対に命を護るのに不可欠で、そこはみんなで合意して、この部分は絶対に必要だということを認識し、基本計画に反映することが重要。

- J R 土讃線の列車の避難場所についてですが、須崎市内で J R 6 駅あり、その中で吾桑駅を避難場所にという話がある。それは協議で問題ないが、各駅のお客さんに周知できるような体制を早く取りたいと考えている。資料づくりを急いでおり、今後市のほうと話し合い協力していきたいと思っている。
- 鉄道敷地の利用について可能かとの話があるが協力できることは協力する考えである。線路に障害等なければならぬ問題等ないと思う。
- 車で逃げるという事について漠然と書かれているが、体の不自由な方、高齢な方はその本人が車を運転することはなく、その家族が乗って移動するというのが実際の場合起こる、事前に車の指定とかの制度設計が必要である。特に須崎の周りは道路が狭いところもたくさんあり、事前にそういった車の指定とか家族の指定、ルート指定、避難訓練などが必要、今後、詳細をつめて頂く計画を立ていく必要がある。車の避難訓練なんか今までやったことがない。
- あの 3・11 の時は車の避難とかはどうだったか。車で避難しないとみんな言っていたんですけど、車の避難を否定していたものが、変わりました。特に平野の広いところは逃げ切れなかった。委員会では最初からクルマでなければ逃げられないという意見を出してきた。
- 3・11 ではクルマで助かった例が多かった。当然減災ということでは必要なことだと思いますが、先ほど言いましたように事前の準備・対策が必要じゃないかと思えます。
- すべてのことがそうだと思うんですが、今まで日本でどこも、こうすればかなりの人命助かると思うことが行われていない。しかし、その実施は絵に描いたように全ていくとは思え、いろいろ訓練をしたり、シミュレーションをしたりということなんです。
- 車の避難について、内閣府のほうでも検討している。県の避難方法を考える委員会でも、ある程度は有効だろうという考えは出ている、やはり限定的に考える、要援護の方を中心に考える、そしてルール化することが重要、地域の中で合意できる状態のものを作らないと、実際は使えない。車と徒歩で避難する方が混在する中での対策、結構つめた議論が必要と考えている。

- 先日、桐間地域の大型店舗に話を聞いた。今のお客さんの客層でいうと30%から40%が、高齢者、いざ逃げる時は徒歩では逃げにくい、しかも、桐間地域についてはどの避難場所に行くにも距離があり、足の弱い方なんかは時間がかかる、その避難方法について具体的に考えておく必要があると思う。実際には逃げきれない。
- 学校の方では、避難訓練というのは学校の施設内で起きた時の訓練は行っている。登下校、子どもたちの登下校時にあったときにどうするのかというところの避難訓練を継続的にしていく、そして命を護る防災教育をどこまで浸透させていくかということがこれから重要。
- 提案されているのは、樹林帯みたいな形で学校のなかにも、たとえば学校の周りかもしれませんが、木を植えることで、瓦礫が流れてきて校舎が直接燃えるんじゃないかとそれを護るとか、そういったことも場合によっては可能。木を植えることは、津波の社会、環境学習のためには重要である。
- ライフジャケットを着ての避難というのを提唱されているんですけど、その辺は学校でどしているか。今年の初めに議論が出たのは、ヘルメットの問題、学校によっては、耐震化ができてる学校のほうではヘルメットよりは防災ずきんのほうがいいのでは、という話もあって当初すべての学校にヘルメットを配布したらどうかという話もしてたんですがそこまではいっていない。
- ライフジャケットまではいってない。ライフジャケットを着とけば瓦礫が流れてこなくなれば、圧倒的に死なないと思います。ライフジャケットというのは今まで全然いわれてないですけど、またこの場で議論していけばいいと思う。
- 植えた木が流れて漂流物にならないような研究をしてみる必要があるのかなと思う。
- お年寄りや家で体の不自由な方の避難については議論されているか。議論はもちろんしているが、これが有効というのまだ見つかっていない。
- だいたいみなさん少し共通の認識も深まってきたとは思いますが、もう少し具体的なことを聞きながら議論をしないとまだ分からない。という感じかと思うんですが、よろしいでしょうか。議論としてはこの須崎市の津波避難と減災対策（案）というものを基にしながら議論してゆきたい。

- 高速道路の横に植栽すると、素晴らしい意見だと思うんですよ。可能性があるか無いかまたぜひご検討いただいて、中核の病院もありますし、瓦礫が来ないということは素晴らしいことだとお聞きしたのですが、是非ご検討いただいて、可能性があるなら進めていただきたいと思います。